

見島のカセドリ行事

見島のカセドリ蓑
製作技術の確保計画

令和2年度 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

蓑の作り方

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

京都市、京都市芸術文化協会



目次

1. はじめに	3
2. 見島のカセドリ行事	4
3. 蓑の各名称と着付け順	5
4. 材料と道具	6
5. 今回開発した蓑の製作手法について	8
6. 蓑製作工程	9
6-1. 作業工程	9
6-2. 編み方〈基礎〉	10
左三つ縄の作り方	
編み方:双子編み	
編み方:矢羽編み	
編み方:裏編み	
6-3. 材料作り	16
ミゴ抜き	
ミゴの選別	
ミゴ束(巻き結び)	
6-4. 前みの	19
前みを編もう!全体寸法	
アドバイス	
上部(前かけ)編み方	
下部(腰みの)編み方	
上部と下部をつなぐ	
6-5. 背みの	29
背みを編もう!全体寸法	
アドバイス	
背みの編み方	
6-6. 完成	34
7. 修繕方法について	35
8. 講師紹介	36
9. あとがき	37

1 はじめに

見島のカセドリ藁蓑製作技術の確保計画

「見島のカセドリ藁蓑製作技術の確保計画」は、「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」において2020年度に採択した事業で、2020年～2024年まで、見島の加勢鳥保存会と伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスが共同で実施しました。

「見島のカセドリ行事」は、佐賀県佐賀市の蓮池町見島地区で350年以上続く伝統行事で、2018年にユネスコ無形文化遺産「来訪神：仮面・仮装の神々」として登録されています。加勢鳥という名前は、「加勢」は手伝うという意味があり、田畑づくりなど皆で協力して手伝うのが習慣であったこと、また神様が人を助けるために送り出した使者を鳥と考えられたことに由来しています。

「見島のカセドリ行事」は2月第2土曜日に、見島地区の熊野神社と地区内の家々にて執り行われています。神の使いである雌雄のカセドリに扮した青年2名が、蓑・笠を身にまとい、顔には白手拭いを巻き、手に青竹をもち、見島地区内を駆け回ります。

現在使用している蓑は、2007年製のもので、佐賀市内在住者に使用していた蓑を見本として手渡し蓮池地区で収穫した藁で製作していただいたものです。経年劣化が進むとともに、カセドリが家の玄関に走り込みしゃがんで竹をうつ所作により前みの消耗が激しく、新調する時期にきています。しかし、2018年時点では九州地方に見島のカセドリの蓑を製作する職人がおらず、なんとか持ち堪えながら使用している状況でした。

本プロジェクトでは、藁文化研究の第一人者である宮崎清氏(当時・千葉大学教授)から、見島のカセドリ行事の蓑の特徴を伝承する技術をもつ藁職人である荒川美津三氏をご紹介いただき、加勢鳥保存会に藁蓑の製作技術を伝承していただきました。

本冊子は、見島のカセドリ行事蓑製作に際し、荒川氏にご指導いただいたプロセスを示すとともに、今後、加勢鳥保存会が蓑の製作技術を継承していくための指南書となるよう、アドバイスも書き加えて製作しました。また、万が一、地区にて蓑の製作技術が失われた際、他地域の藁製作に携わる方が、カセドリ行事の蓑製作をサポートしていただく一助になればという願いも込めて作成しています。

2 見島のカセドリ行事



熊野神社



藁や先を裂いた竹等の行事に使う道具



藁・笠を身につけ青竹を持ったカセドリ



カセドリ行事

「見島のカセドリ行事」は、佐賀県佐賀市の蓮池町見島地区で350年以上続く伝統行事で、毎年、小正月行事（現在は2月第2土曜日）に開催されています。神の使いであるカセドリに扮した未婚の青年2名が地区の家々を巡り、新年を祝福します。

雌雄のカセドリ役の2名は、藁・笠を見にまとい、顔には白手拭いを巻き、手には先端部分を細かく割った長さ約1.8mの青竹を持ちます。

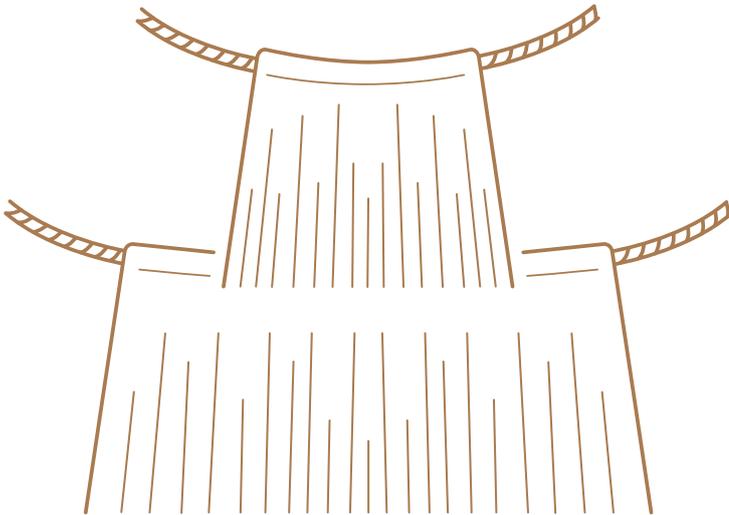
神事は、地区内にある熊野神社で始まります。カセドリは、勢いよく拝殿に走り込み、両膝を付き、体を前にかがめて、持っている青竹を床に激しく小刻みに打ち鳴らします。その後、頃合いを見計らって差し出された盃に注がれた酒を飲み干し、同じ所作を続けます。

神社での神事が終わると、行列を組んで地区内の家々を訪れ、カセドリは青竹を打ち鳴らします。この竹の音で悪霊を祓い、家内安全や五穀豊穰を祈願します。また各家々で振る舞われる酒を飲むときのカセドリの顔を見ることができた年は幸運に恵まれるという言い伝えもあります。

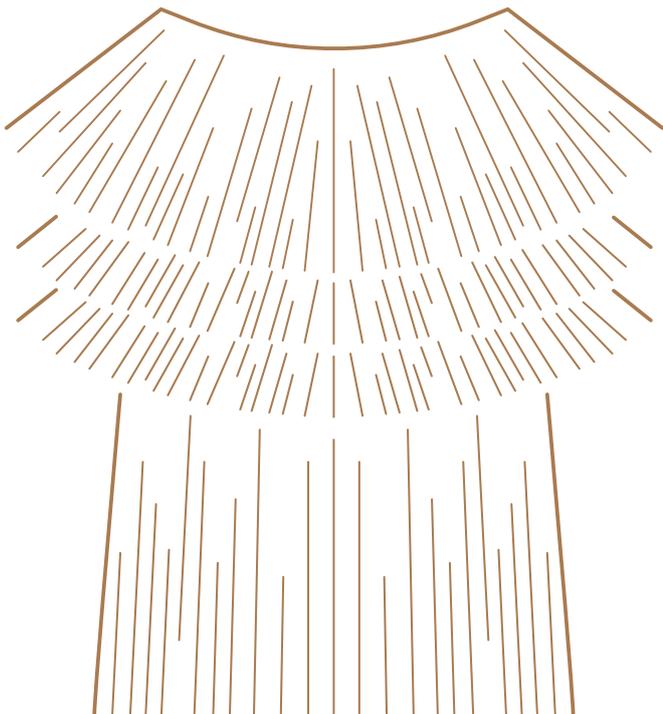
佐賀市教育委員会文化振興課

3 蓑の各名称と着付け順

■ 前みの(前かけ・腰みの)



■ 背みの



1. 前みのの首の縄を後ろ、腰の縄を前でそれぞれ結ぶ



2. 背みのを羽織る



3. 胸前で縄を交差させ、後ろにまわす



4. 後ろにまわした縄を腰の位置で結ぶ



5. 完成

4 材料と道具

■ 材料



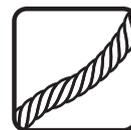
ミゴ

計 18,500本
前みの…約3,500本
背みの…約15,000本



縄ない用

イグサ…細縄、三つ縄
※藁より強度があるため
前みの(上部と下部)、背みの
1段目に使用



藁…藁の脇に使用する縄ない



毛糸(極細)

1巻き



カタン糸(太)

1巻き



麻ひも

細いもの 1巻き
太いもの(太さ3mm)



■ 道具

クリアホルダー



マジック



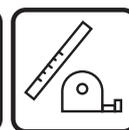
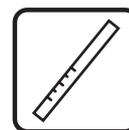
スプレー



木の板で作ったものさし



1. ミゴを選別する際に
(60cm位のものを作成)
2. 蓑を編む際に使用
(30cmの物差し or メジャー)



はさみ



1. 花はさみ
2. 先のとがったはさみ
3. 工作用はさみ



さし藁用金具



竹へら



ひも通し用竹へら



藁打ち木槌と台



弓 竹に縄ないを張って作ります





従来の形



開発した形

まずは、加勢鳥保存会から現在使用している蓑を拝借し、荒川氏と助手の御厨氏と共に、既存の蓑を細部にわたりリサーチすることから始めました。また、カセドリ行事の映像や資料により、蓑の着装者の所作や動きの確認もあわせて行いました。

現在、カセドリ行事で使用している蓑は、2007年製のもので全体的に経年劣化が進んでいる状況ですが、その中でも大きく損傷している箇所が前みの下部(腰みの)でした。カセドリは玄関までかなりのスピードで走り込みしゃがんで竹を床に激しく叩きつけるので、前みの下部の損傷はその影響であることがわかりました。

既存の蓑は、写真のように蓑の端から端までを一気に編み込んでいるため、損傷箇所のみを取り出すことができず、すべてを抜き取り修繕していく必要があります。そのため、修繕の際には全体を製作しなおす必要があるため、蓑製作をこれから学ぶ保存会にとっては、とてもハードルが高い作業であることがわかりました。

その状況を見て、荒川氏より、一度に必要寸法を編み込む従来の手法ではなく、前みの下部を5つのブロックに分け、それぞれが独立して開く形をご提案いただきました。写真のように5つに分けることで、損傷が激しい箇所のみを修繕する作業が可能となります。このアイデアは、鎧で使われている甲冑様式を取り入れたとのことで、着装者が動きやすくなることも配慮いただいています。

また、既存の蓑の裏側は網目が外に出る編み方でしたが、その技術を初心者が習得するまでに時間がかかり過ぎるため現実的ではないと考え、習得しやすい裏編み(P.13-15参照)に変更いたしました。

本冊子では新たに開発した見島のカセドリ行事の蓑製作を記録しています。

6 蓑製作工程

6-1 作業工程

以下、5つの作業工程に分けて作り方を説明します。



全作業工程

1. 材料作り
(ミゴ、三つ縄)



2. 前みの上部
(前かけ)



3. 前みの下部
(腰みの)



4. 前みの合体



5. 背みの



■ 編み方記号一覧

・ 巻き結び
(別名: とっくり結び)



・ 双子編み



・ 矢羽編み



・ 3つに分ける



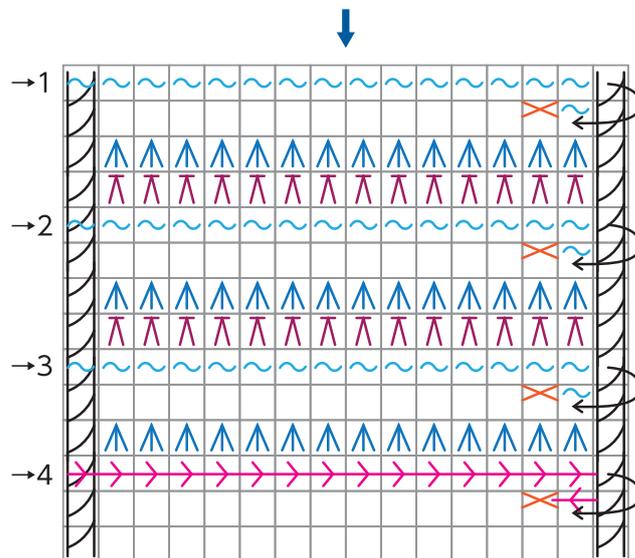
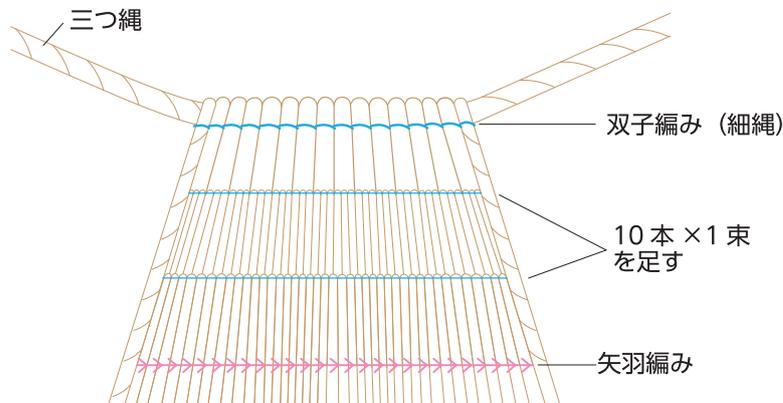
・ 裏編み (足しミゴ有)



・ 縄ない



使用例



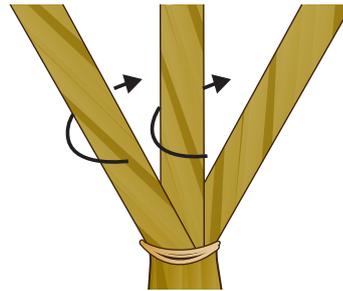


6-2 編み方〈基礎〉

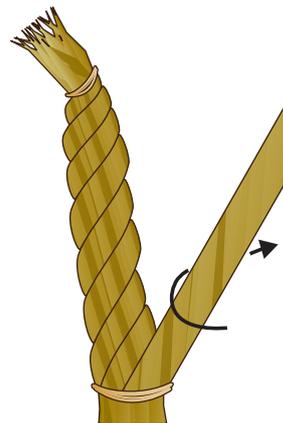
- **作る前に**
- ① 藁は作業する前日に水に浸しておく。
 - ② 翌日、根元から裏までしなしなになるまで叩くと、丈夫な藁になる。
 - ③ 左三つ縄は3本とも同じ太さのものを選び、作業する。

■ 左三つ縄の作り方

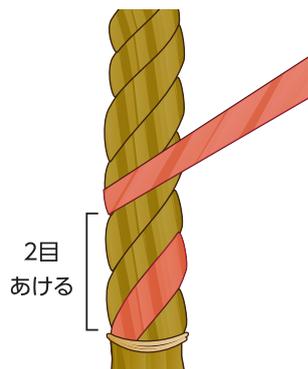
① 藁の束の根元を麻ひもでしばり、3つの束に分ける。



② しばった箇所の下を押さえ、手前の2束をそれぞれ右向きにねじる。



③ それぞれをねじりながら、左向き（反時計回り）になう。必要な長さになるまで藁を足しながらなう。先端を仮止めしておく。



④ 残りの1束を2目おきにそわせるように、巻きつける。藁を足しながらなう。

⑤ 仮止めをはずし、3本を一緒にしばる。

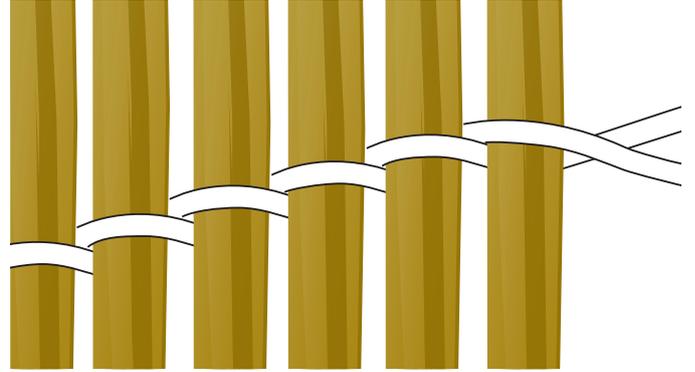
〈三つ縄 完成〉

※左三つ縄ができない場合は、ホームセンターなどで麻縄を売っています。適当な太さのものを買って使用してください。実は丈夫で長持ちします。





■ 双子編み

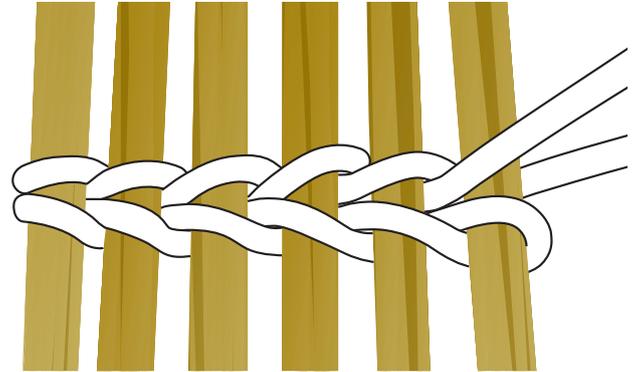


※双子編みのひもの長さは、編む幅の3倍から4倍とる。
(長いひもにすると編みにくい場合は、途中でひもをつなぐ)





■ 矢羽編み



※最初の1列目とは反対のひもの動かし方をし、ハの字（矢羽模様）になるように編む。

例

- ① 右ひもを左上、左ひもを右下にわたす。（双子編み）
- ② 2列目
1列目と反対、右ひもを左下、左ひもを右上にわたす。
- ① ②を繰り返す。





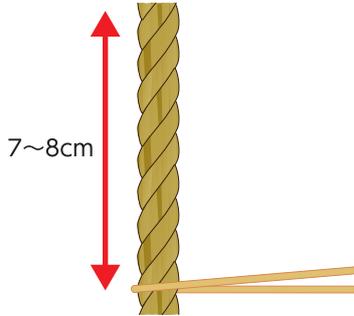
■ 裏編み



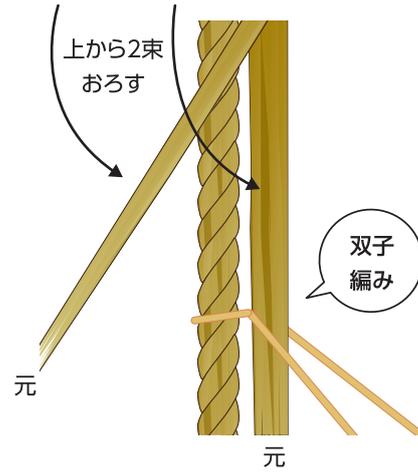
 裏編み

1段目

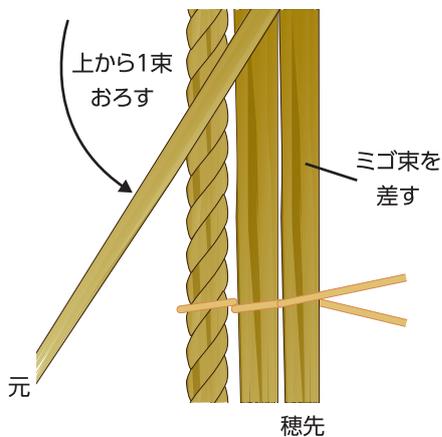
① 縄ないの7cmほど下に麻ひもを交差させる。



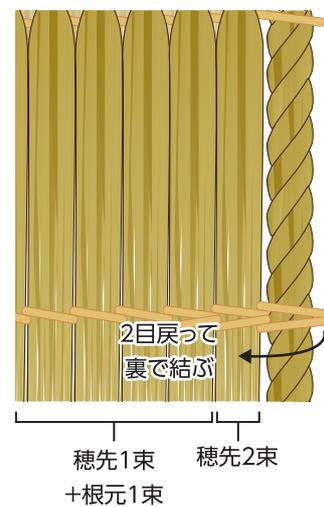
② まず最初は、上に出ているミゴ束（根元）を2束をおろして双子編みをする。



③ 次からは、差したミゴ束の穂先の下に麻ひもを通し、上の1束（根元）をおろし2束で双子編みを繰り返していく。



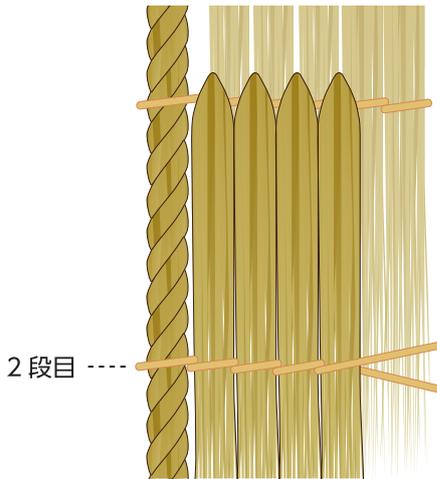
④ 最後に、下に出ている穂先2束を一緒に編む。縄ないの縄を結んだら2目ほど戻って裏で結ぶ。



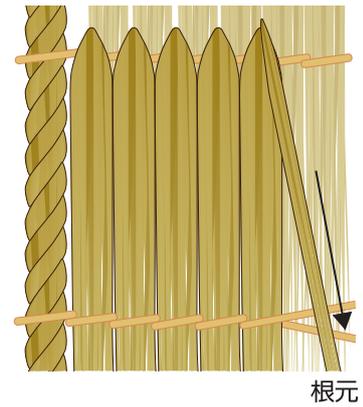


2段目以降

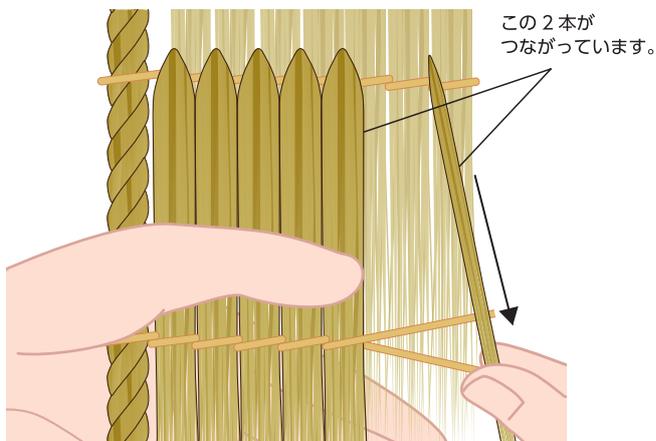
① 双子編みをしたミゴ束に1段目と同様に、足しミゴをして双子編みをする。



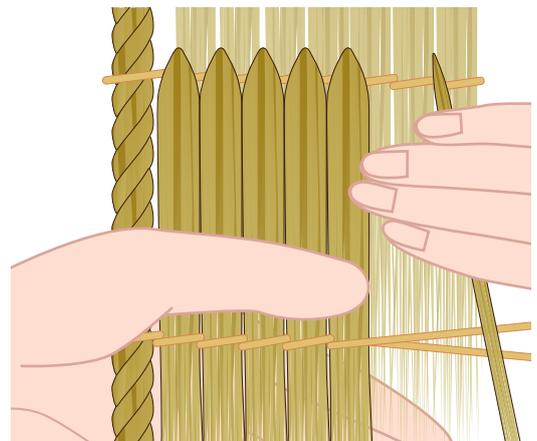
② 上に出ている根元のミゴ束をひっぱりながらおろす。



③ 根元のミゴ束を左手でしっかり持ち、2束先の稲穂をひっぱりながらおろす。



④ 裏側にゆるみが出すぎないように押さえて整えながら編んでいく。



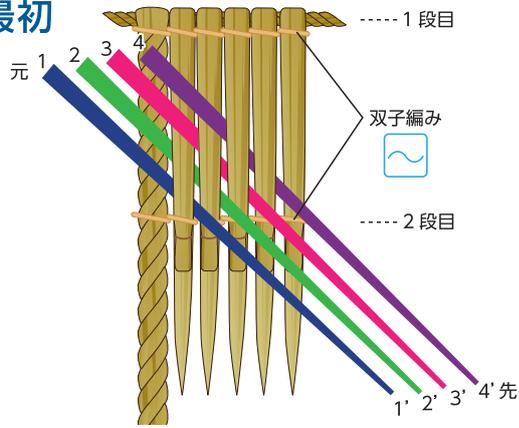


ミゴの入れ方とおろし方

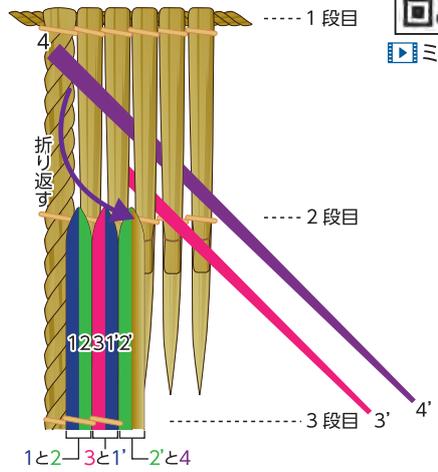


▶ ミゴのおろし方

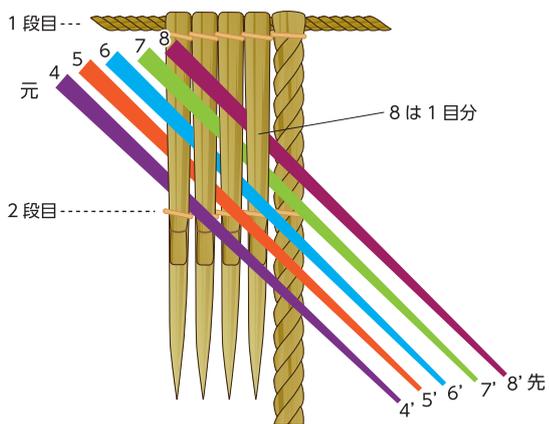
1 最初



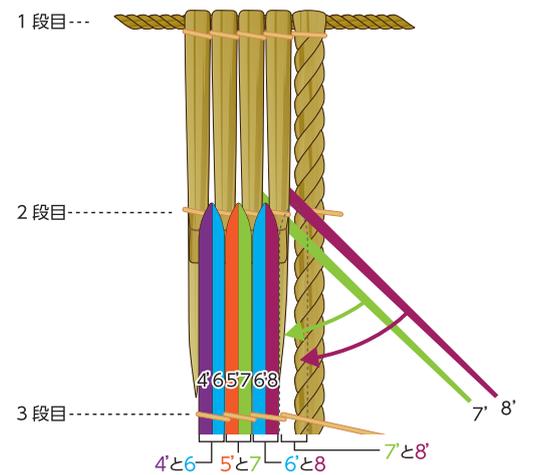
2



3



4 最後





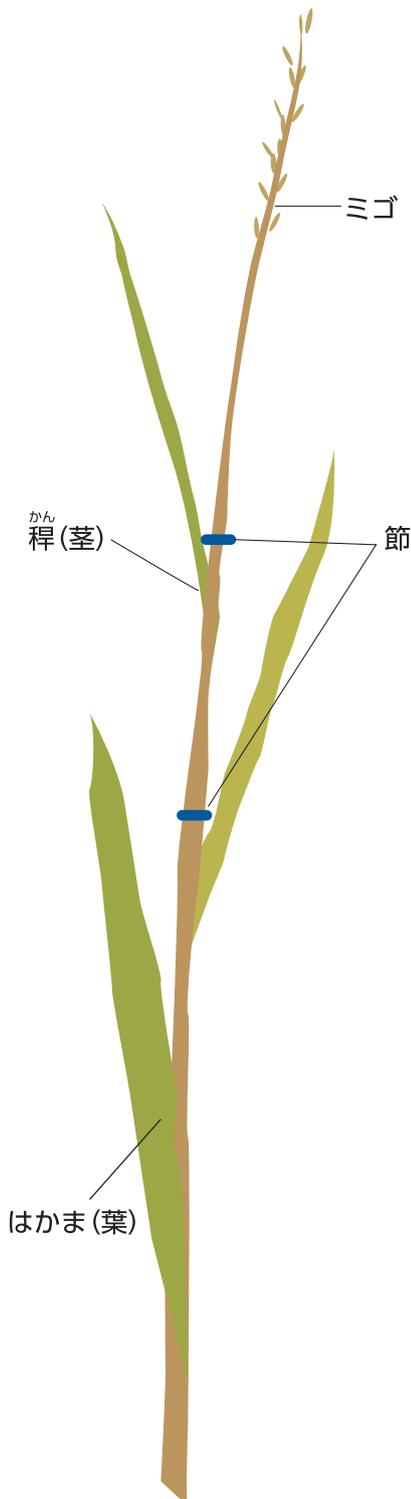
▶ ミゴを抜く方法

6-3 材料作り

■ ミゴ抜き

〈ミゴの扱い方〉

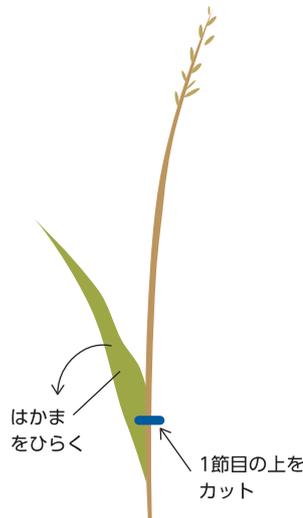
山形県などの加勢鳥行事の蓑は、藁を使用していますが、見島のカセドリ行事の蓑は、ミゴで作られています。まず、ミゴの扱い方と3つの作業について説明します。ミゴとは、お米をとった後の「穂」の部分のことです。



〈ミゴを抜く方法〉 以下、2通りの手法があります。

方法1

はさみで藁の1番上の節の上をカットする。その後、ミゴを引き抜く。



(良い点)

- ・ミゴを無駄なく取ることができる。
- ・真っ直ぐに取りやすい。
- ・誰にも容易にできる。

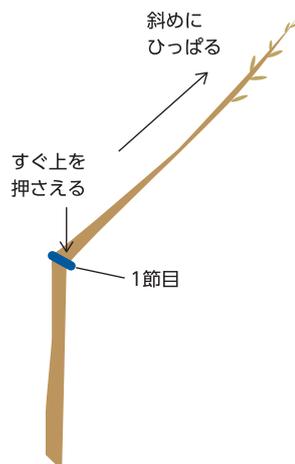
(気になる点)

- ・カットした後、ミゴを抜くためのひと手間がかかる。

または

方法2

1番目の節のすぐ上を指で押さえて、ミゴの軸を持ち、斜めにひっぱる。



(良い点)

- ・一度の手順でミゴを抜くことができる。

(気になる点)

- ・途中でミゴが切れてしまうことがある。
- ・慣れるまでは要領が必要。



■ ミゴの選別

抜いたミゴを、長さにあわせて分けます。

★この作業は、次の束ねる作業をスムーズにするための準備です。

★数の多い長さのミゴを基準として、長短2~3のグループに仕分けをします。

短いものは捨てずに分けておき、別の用途として使用しましょう。



1段目を編むミゴ

- ① 長めのものが良い。(50cm 以上あると編みやすい)
- ② 30本1束のもの 約50束 (前みの用)
40本1束のもの 約40束 (背みの用)

2段目から編むミゴ

- ① 10本1束
- ② ①を以下のように大量に使います。
前みの 約200~300束使用
背みの 約1,300~1,500束使用
※着装者の体型に合わせて、ミゴを用意してください。

- ・首周りや胴周りなどの最初の1段目は、長めのミゴを使うなど用途によって使い分ける。
- ・蓑を作成していく際、長さを揃えることで、一部薄くなるなどでこぼこにならずに綺麗な蓑に仕上がる。
- ・双子編みがやりやすい。





■ ミゴを束ねる

■ ミゴを束ねる

① 同じ長さのもの(約50cm)を揃える。
(45cm、55cmでも可)



② ミゴ先を揃えて、10本を1束にする。



③ 束の根元を切り揃える。



④ 根元から2cmくらいの所を糸で結ぶ。

★カタン糸など細く丈夫な糸を使用し、束がほどけないようにしっかり結ぶ。
(結び方は、とっくり結び、うの首結び、巻き結びなどと呼ばれているもの)



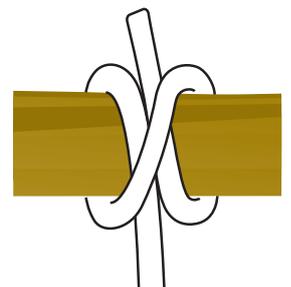
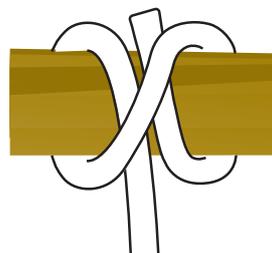
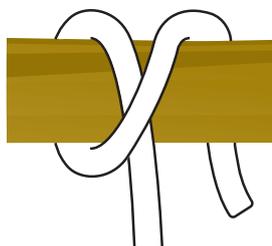
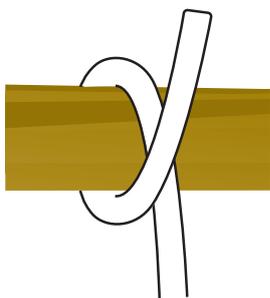
〈ミゴ束 完成〉

見島のカセドリ行事の蓑は、上記の作業がとても大切。ミゴ束の作業は一人だと疲れるので、チームを作り分担することで負担も減り、早く綺麗に作成することができます。



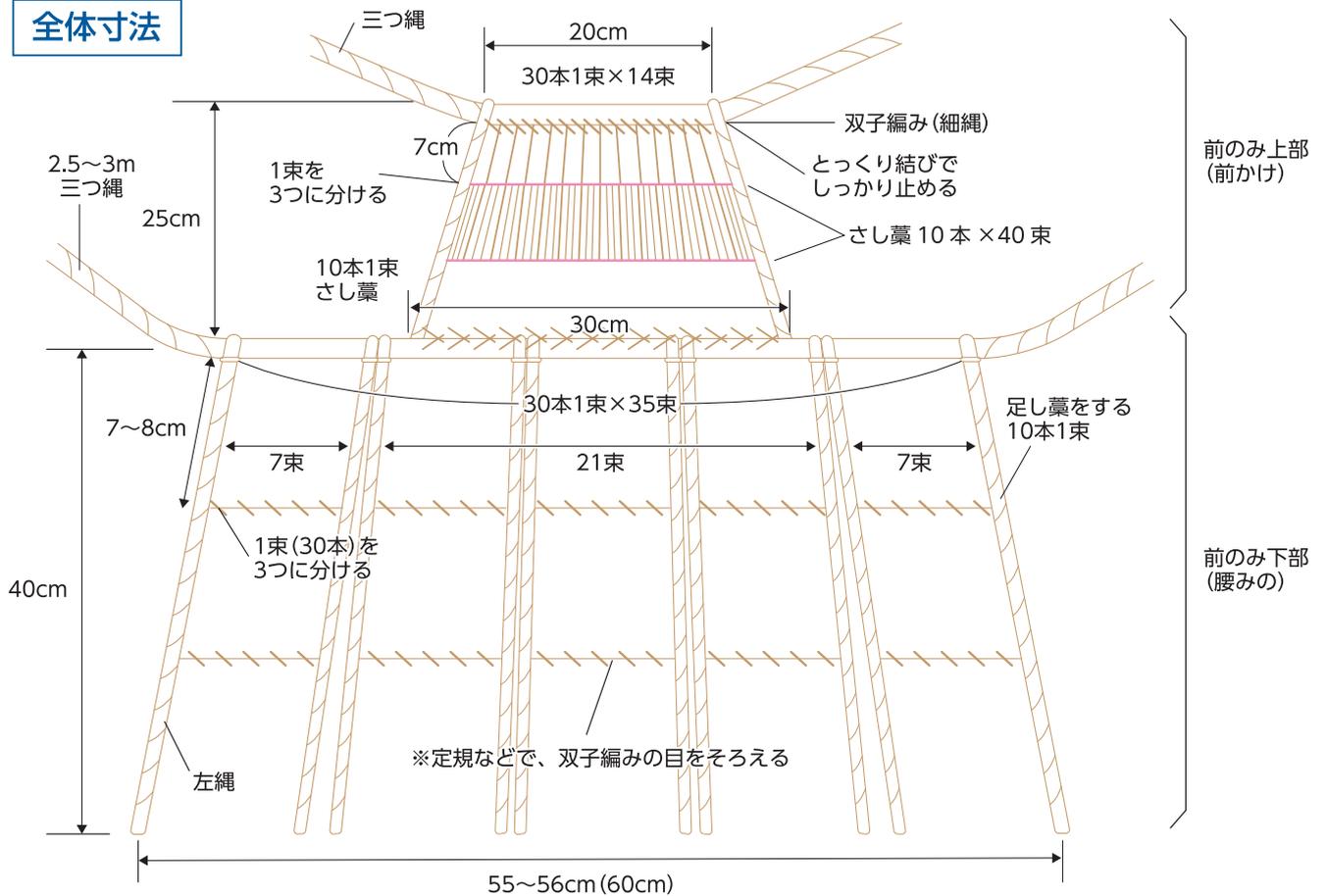
■ ミゴの結び方 —巻き結び—

1. 反時計回りに1回巻いて交差させる → 2. もう1回巻きつける → 3. 交差部にきたら2周目の輪にくぐらせる → 4. 結び目を締めてできあがり

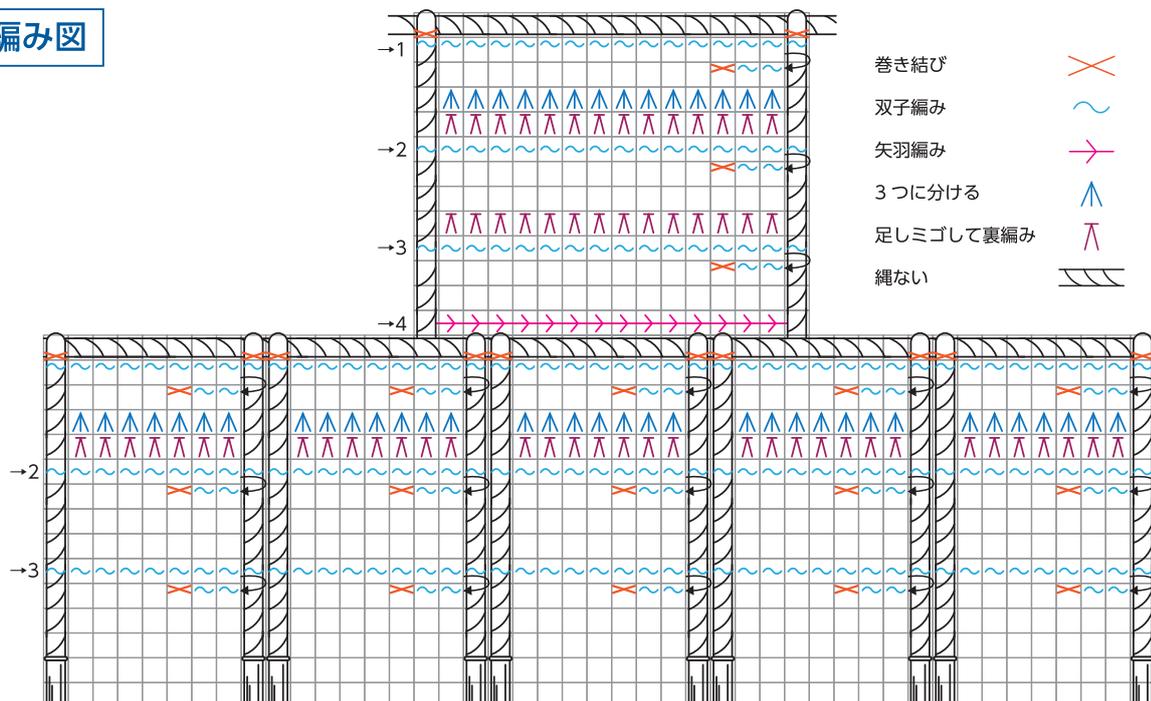


6-4 前みの

■ 前みを編もう!全体寸法 ※鎧や甲冑のように胴から下に分けて編む図面です。



編み図

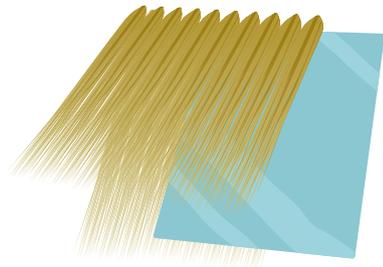




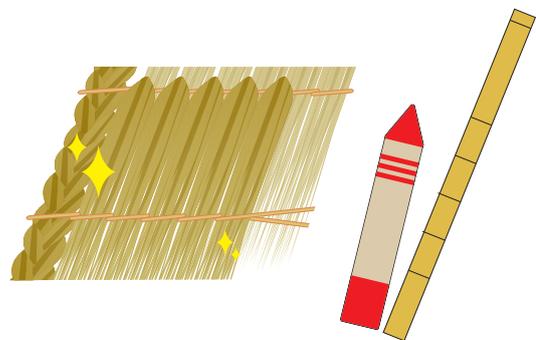
■ アドバイス



★ミゴ束の差し込みや双子編みは、異なるミゴを一緒に巻き込んでしまうことがあるので、クリアホルダー（下敷き）などを挟みながら作業をするとわかりやすいです。



★一段終わるごとに、竹べらと定規を使って編み目を整えること。仕上がりが綺麗になります。



★着装する人の体型に合わせて、前みの上部の編む段数を増やしてください。



■ 上部(前かけ)編み方 ※全体寸法と編み方はP.19



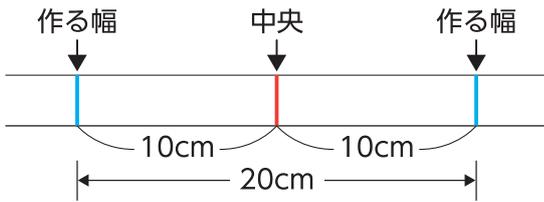
▶ 上部(前かけ)編み方

前準備：三つ縄にミゴとサイド用縄をとりつける準備をする

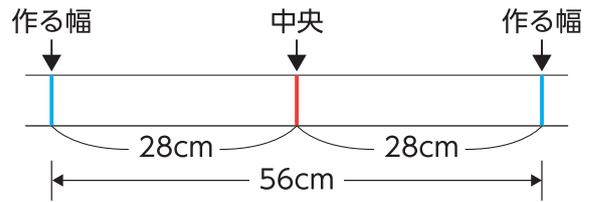
- ① 縄の中央、作りたい幅にマジックで印をつける。

前みの(前かけ)に使う縄の長さ 首まわり…120cm 胴…300cm

〈上部〉



〈下部〉



- ② 印を付けた箇所に、イグサでなった縄をとりつけ、麻ひもで巻き結び (P.18 参照) でしっかりしぼる。縄をなう。

- ③ ミゴ束 (10 本束) を 3 束 (30 本) をひと束にする。これを 14 束準備する。

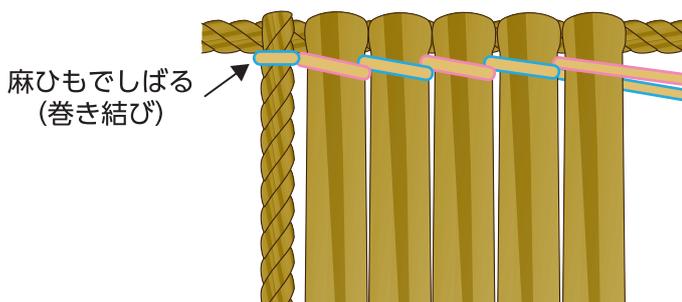
★ミゴを束ねた糸はまだ取らないこと。次の段で3つに分けるのに便利。

上部 1段目

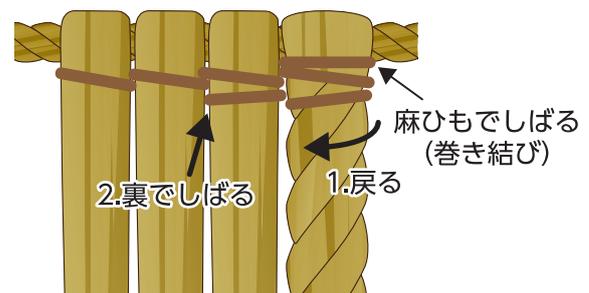
- ① 編み始めの縄を、麻ひもでしぼる。
 ② イグサでなった縄でミゴ束 (30 本) を双子編み (P.11 参照) をする。
 ③ 端 (終わり) も縄を取り付け、麻ひもでしぼる。
 ④ 双子編みで 2~3 目戻り、裏で結ぶ。



〈編み始め〉



〈編み終わり〉

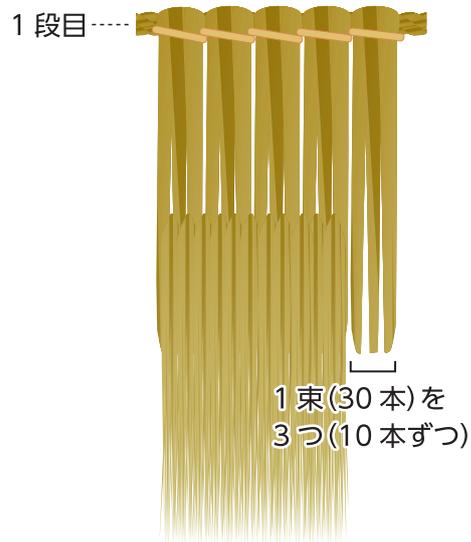




前みの(表)



前みの(裏)



上部 2段目

- ① 7cm 下がった箇所、ひと束 (30 本) を 3つ (10 本ずつ) に分ける。
- ② 分けたミゴ束を麻ひもで双子編みをする。
- ③ さし藁用金具を使い、ミゴ束 (10 本) をひと束にしたものを、根元の方からそれぞれ差し込む。

★裏編みの図 (P.15) を参照して最初と最後の入れ方に注意。



上部 3段目

- ① 7cm 下がった箇所を麻ひもで双子編みをする。
- ② ミゴ束 (10 本) を 1 束ずつ差し込む。



上部 4段目

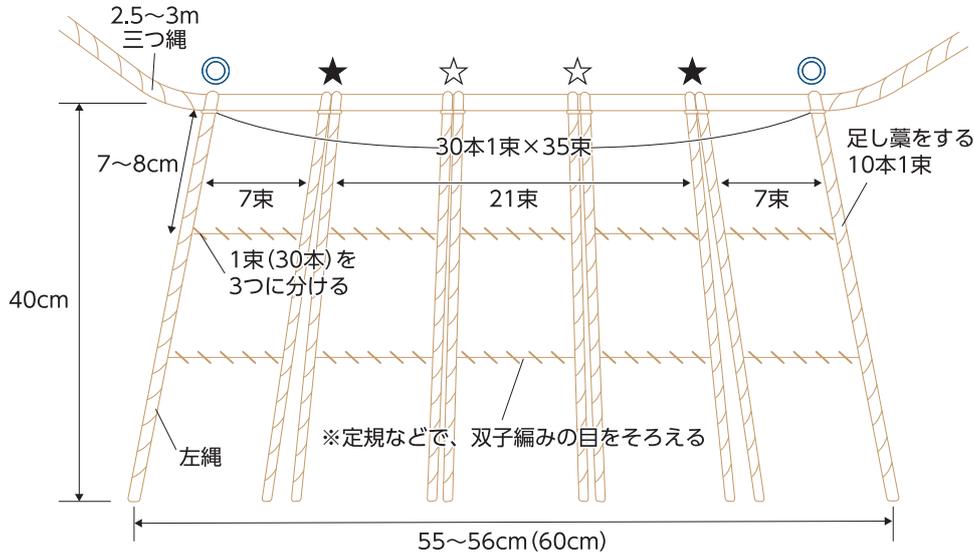
- ① 7cm 下がった箇所を麻ひもで矢羽編みをする。
この際、足しミゴはしないこと。
- ★前みの下部 (腰みの) とつなぐ箇所なので、強度をもたせるために矢羽編みをする。(P.12 参照)



■ 下部(腰みの)編み方 ※全体寸法と編み方はP.19



下部(腰みの)編み方



1. 三つ縄にミゴ束とわら縄を取り付ける準備をする。

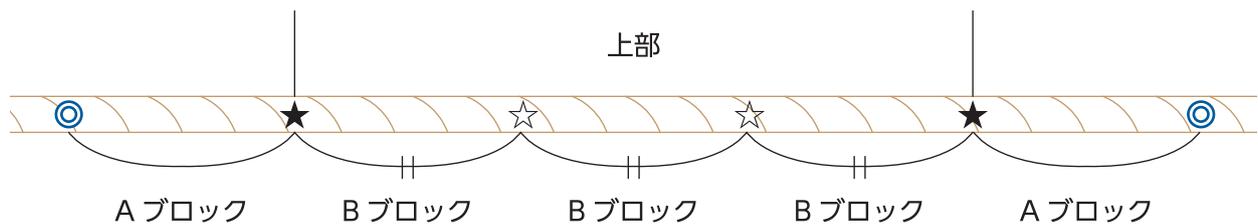
① 作りたい長さに印をつける。(◎)



② 前みの上部と合わせる両端に毛糸や目立つ色の糸など印をつける。(★)



③ ②で付けた★印の間を3等分した箇所にも印をつける。(☆)





2.1 段目

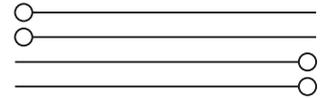
ミゴ束(30本1束)…35束 縄ない用藁束…10束

① ◎をつけた箇所から縄ないをする。

ミゴ束と縄ない用の藁を◎、★、☆の所にそれぞれつけながら、全て双子編みをする。(P.23 写真参照)

縄ない用の藁は、組み違いにして、1束2~3本を三つ縄にかけてなう。

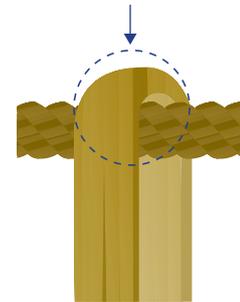
◎ … 1束 × 2 ★, ☆ … 2束 × 4



② まず、◎印に縄ないと30本1束にしたミゴ束をイグサでなった縄で双子編みをしながら、★印の所に藁2本を組み違いにして、2組入れて縄をなう。(Aブロック)



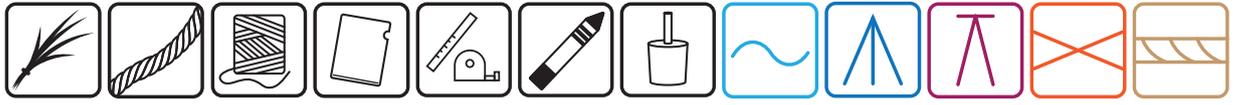
※曲げる所をしめらせてしっかり叩く。
ミゴを叩いて柔らかくすることによって、
角がたたずに綺麗にできる。



③ ★と☆の印をつけた所に、縄ない用藁を2束入れながら、最後まで双子編みをする。
鎧、甲冑など腰下に着用する。真ん中を中心に両脇を分ける。



30本1束 × 35束
両サイド縄◎ × 2本
縄2本★ ☆ × 4カ所

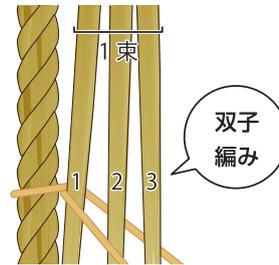


3.2段目

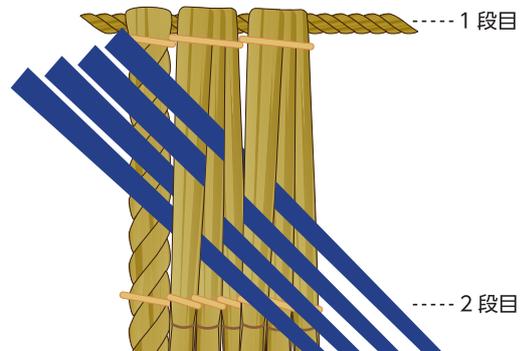
5つのブロックに分ける

- ① 7cm 下で、ひと束 (30 本) を 3つ (10 本) に分けて、1つずつ麻ひもで双子編みをする。それぞれのブロックごとに編んでいく。

★クリアホルダーを挟みながら作業する。



- ② ミゴ束 (10 本) をブロックごとに差し込んでいく。





③ 麻ひもでブロックごとに双子編みをする。



4.3段目

① 上に出ているミゴ束を下げながら、
7cm 下を麻ひもで双子編みをする。

★最後の段は、強度が必要なので矢羽編みにする。

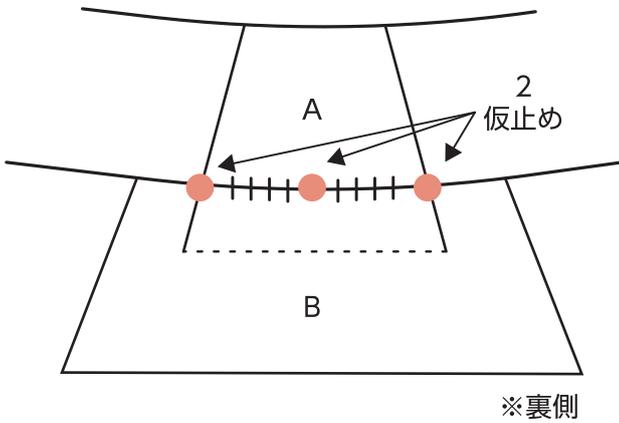


★裏編みは3～4の手順を繰り返す。

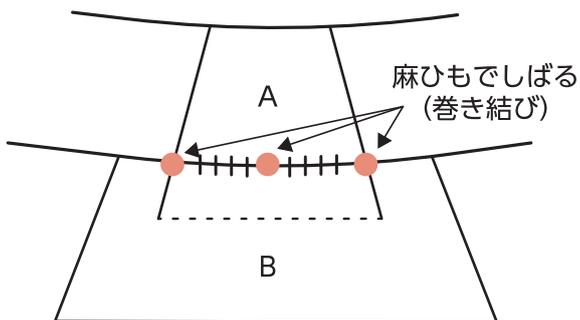


■ 上部と下部をつなぐ

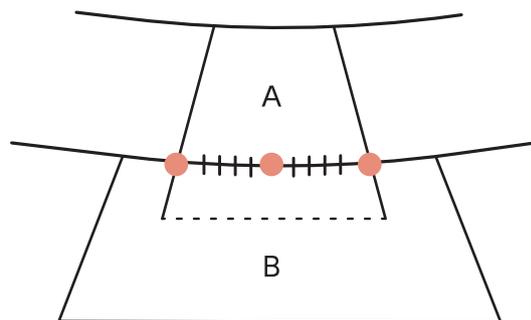
1. 上部 (A) の裏側の矢羽編みの上に、下部 (B) を裏側がみえるように重ねる。
2. A と B が動かないように、中央と重なる両方の端をしっかりと仮止めする。
3. ひも通し用竹べらに、太めの麻ひもを通して A と B を縫いとめていく。



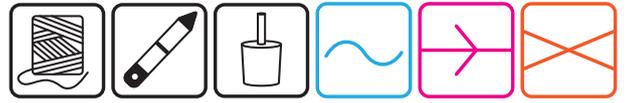
4. 仮止めの A の端を太めの麻ひもで巻き結びをし、しっかりと結ぶ。



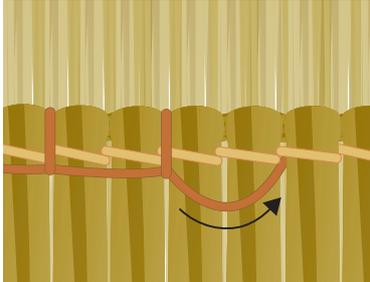
5. B の双子編みの箇所にひもを出す。



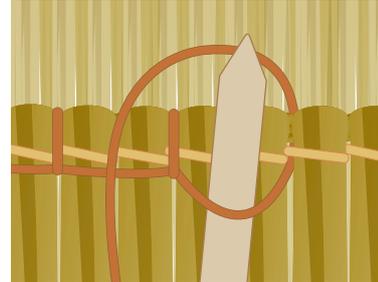
上部と下部をつなぐ



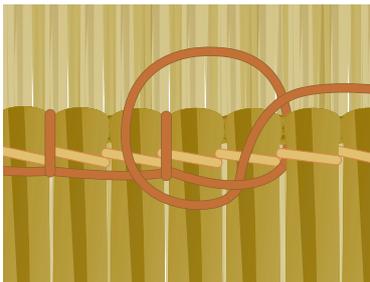
6. 2つおきに結ぶ。上から下に通す。



7. Aの矢羽編みの所をまたぐようにひもを通し、Bに戻る。6のひもに下からくぐらせる。



8. しっかりと麻ひもを引き締める。



9. イグサでなった繩の双子編みに沿わせるようにして、繰り返しばる。最後もしっかりしばる。とっくり結び（脇結び）をする。最後に軽く木槌で叩いてならず。裏返して完成。

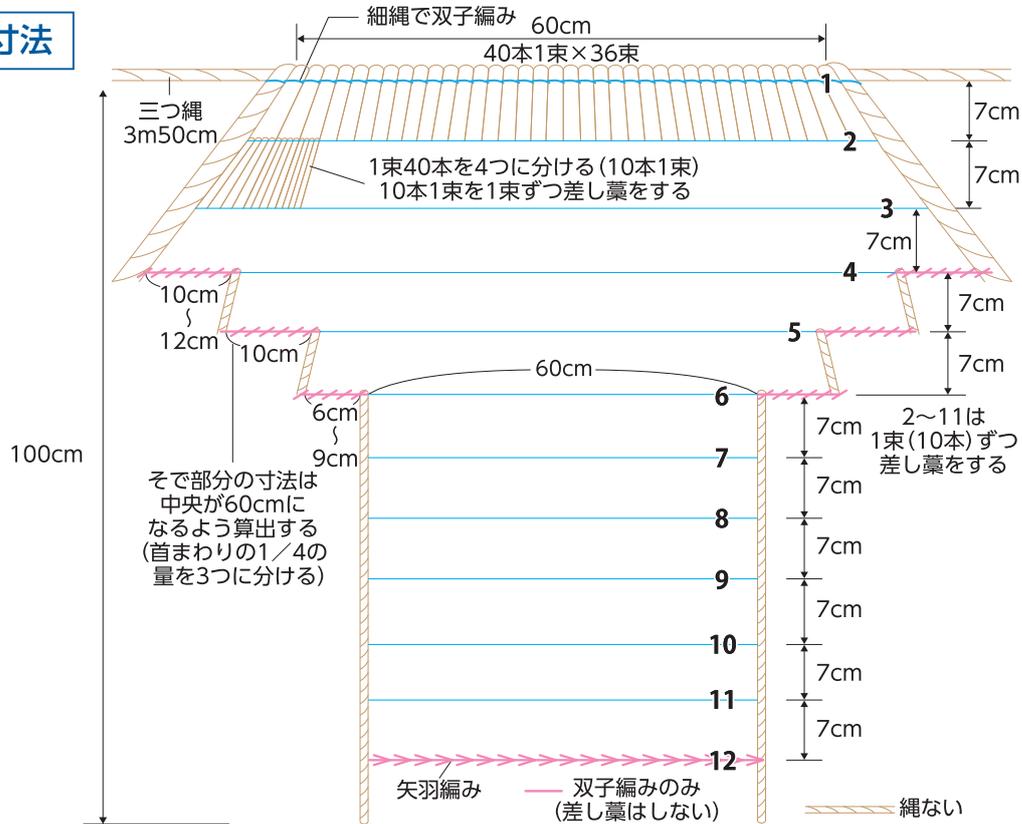
★麻ひもが表にでないように気をつける。



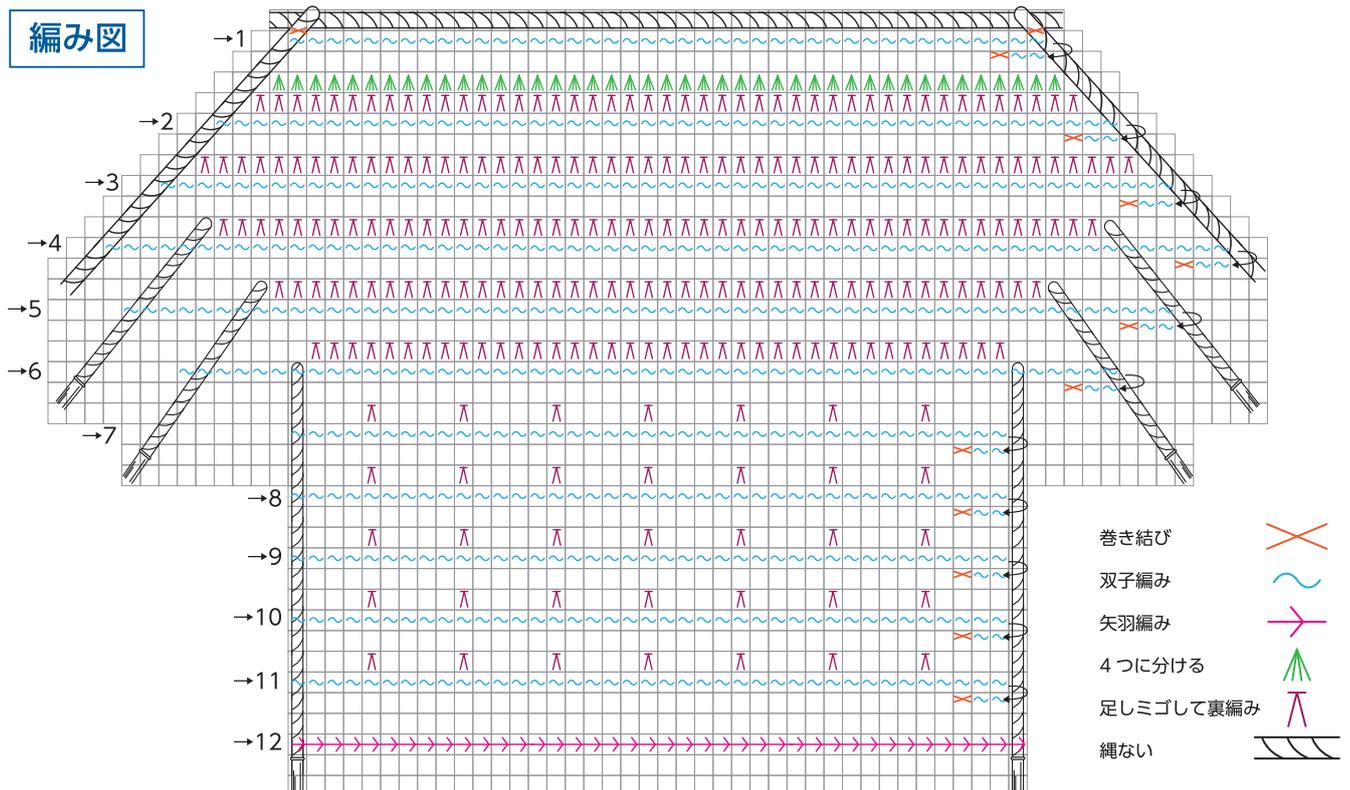
6-5 背みの

■ 背みのを編もう!全体寸法

全体寸法



編み図



■ アドバイス

- ★ミゴ束の長さを揃えておきましょう。長いもの、短いもの、それぞれの使い道があります。
首回りや中心にくるミゴは長めを使用します。
短いものは、肩部分の4段目、5段目の両サイドや、全体の最後の段に使用できます。
- ★最初の首回りに使用している縄を弓に張る時は、ピンとしっかり張ること。
緩んでいると、綺麗な蓑ができず波をうってしまいます。最初が肝心!!
- ★3段目ぐらいからは、弓から外したほうが、作業がやりやすくなります。
藁を分ける作業が入ってきて、網目が細かくなっていくためです。
- ★双子編みをしたら、1段ごとに竹べらや定規を使って編み目を整えましょう。
仕上がりが綺麗になります。
- ★双子編みのときの麻ひもは、左にあるものを右下に、右を左上にというように
必ずひもは1回ずつ左右に移動させてください。麻ひもを移動せずに双子編みをすると、
からまってしまったり、間違いやすくなります。
- ★双子編みの量が多いですが、麻ひもを4~5倍とってしまうと長すぎて他のものを
巻き込んでしまう可能性があるため、少し短めにとりましょう。
麻ひもが足りなくなったら途中で足すこと。
- ★着装する人の体形に合わせて背みの編む段数を増やしてください。



■ 背みの編み方



▶ 背みの編み方

前準備

1. ミゴ束を作る。

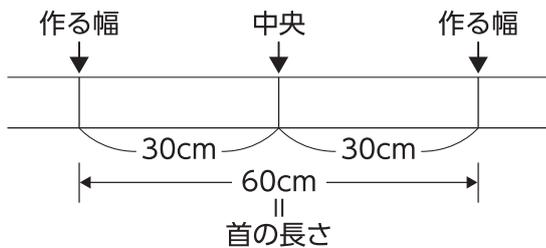
10本束を4つまとめて、40本の束を36束つくる。

★ミゴを束ねた糸は取らないこと。次の段で4つに分けるのに便利。

2. 三つ縄にミゴ束(40本)と縄をとりつけていく準備をする。

① 首の長さの幅、縄の中央、作る幅にあわせてマジックで印をつける。

背みのに使う縄の長さ 350cm



② 印を付けた箇所に、縄ないの縄を麻ひもで巻き結び(またはとっくり結び)をし、しっかりしぼる。

1段目

① イグサでなった縄でミゴ束(40本)と36束で双子編み(P.11 参照)をする。

★根元を手前に折る。

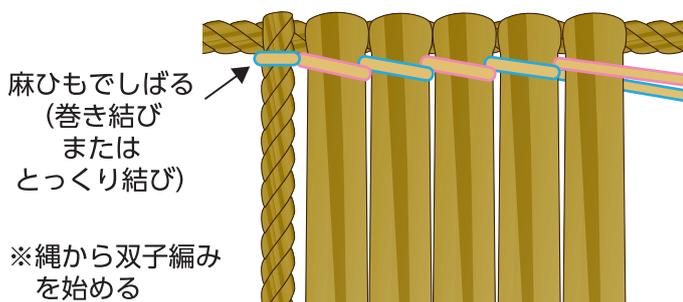
ミゴの長さにもよるが長ければ、14.5cm とるとよい。



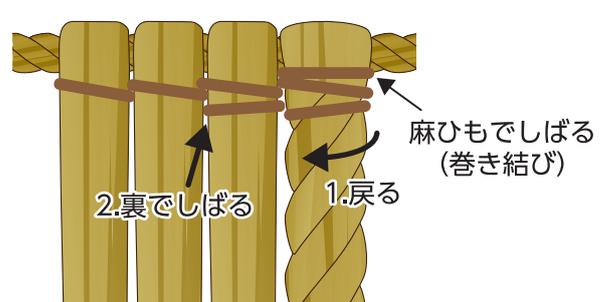
② 終わりも縄を取り付け、麻ひもでしぼる。

③ 双子編みで2~3目戻り、裏で結ぶ。

〈編み始め〉



〈編み終わり〉





2～3段目

注意

麻ひもの長さは、幅の4倍とると長すぎて作業がしづらいので、作業しやすい長さにする。
ひもは途中でつなぐ。

① 7cm 下で、ひと束 (40 本) を 4 つ (10 本ずつ) に分けて、麻ひもで縄も含めて双子編みをする。

★後ろのミゴの先をすくわないよう注意する。

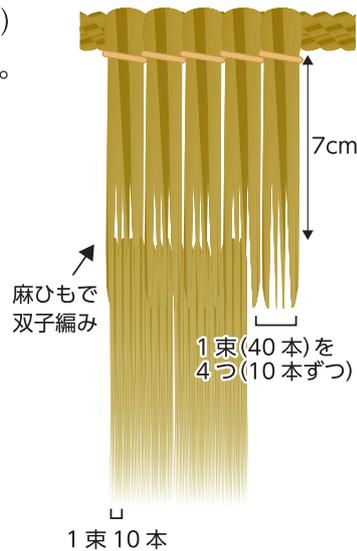
② ①で分けたところにミゴ束 (10 本) を差し込んでいく。

③ 7cm 下を、差し込んだミゴ束を下げながら、双子編みをする。

④ ③で分けたところにミゴ束 (10 本) を差し込んでいく。

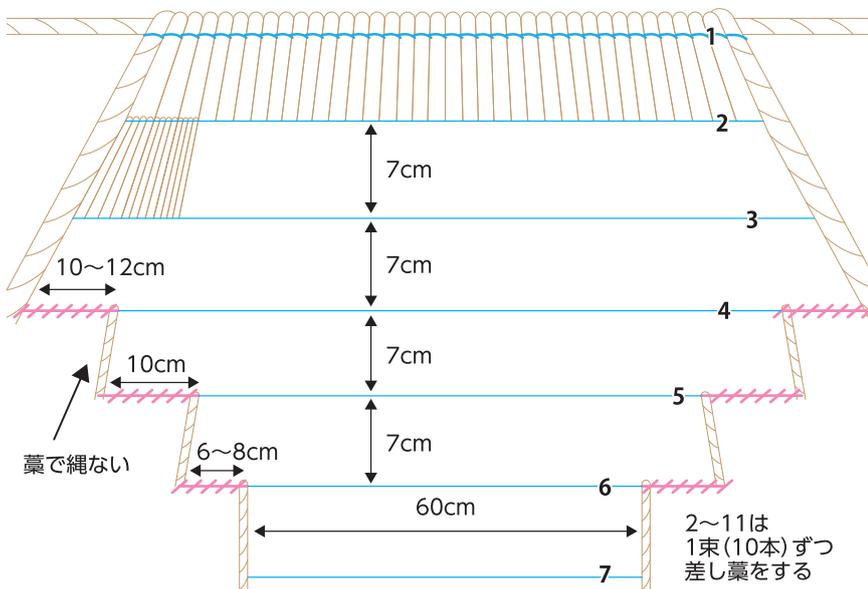
⑤ 7cm 下に差し込んだミゴ束を下げながら、双子編みをする。

★1 段終わったら長さを確認しながら、編み目を真っ直ぐに整えてください。



4～6段目

さし藁の幅を少しずつ狭めて、蓑の肩部分 (そで) を作っていく。減らす目安は7段目からの幅が、60cm になるので、それにあわせて両側の減らす量を決める。(左右とも、首まわりの4分の1の量を3つに分ける) 左右対称にするために、わかりやすい目印 (糸、ビニールテープなど) をつけておく。





4段目

- ① 幅いっぱい双子編みをした後、左端から10cm～12cmのところに、藁をはさみ長さ10cm、縄をなう。
- ② そこから、右の印を付けたところ（右端から10cm～12cm）までミゴ束（10本）を差し込む。右側にも縄をなってとりつける。
- ③ 7cm下にミゴ束を下げながら、双子編みをする。



5段目

- 4段目の端から10cmのところに藁をはさみ10cm、縄をなう。
4段目と同様に4分の1の量を3つに分けたものを双子編みする。



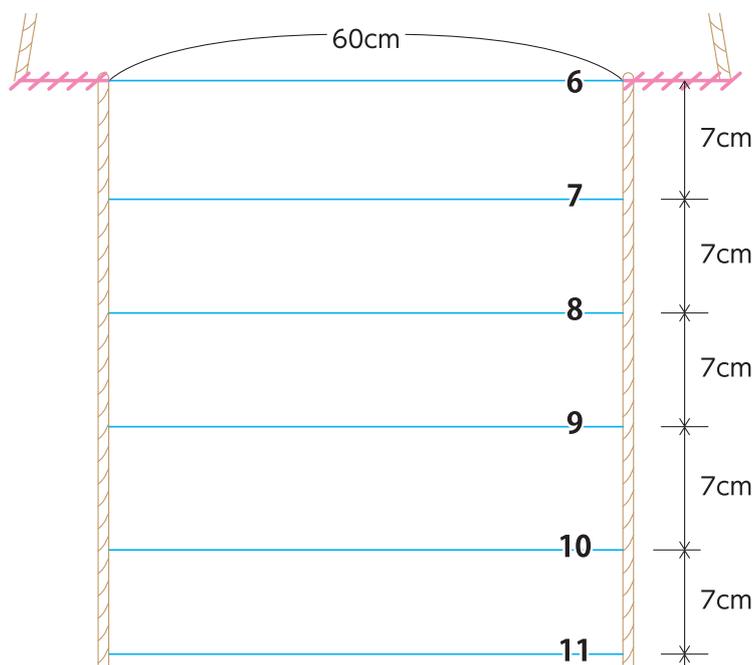
6段目

- ① 7cm下に麻ひもで双子編みをする。
- ② ミゴ束（10本）を1束ずつ差し込む。

7～11段目

幅は60cmのまま、各段7cm間隔でミゴ束を差し込んでいく。
麻ひもで双子編みをしてから、ミゴ束を差し込んでいくのを繰り返す。

★一番下の段は矢羽編みにする。



6-6 完成

■ 前みの 完成



■ 背みの 完成



7 修繕方法について



現在使用している蓑の損傷が激しい箇所の修繕方法などを学びました。

★首回りの縄

新しい藁を足して、なう。

★穴があいている

穴があいている箇所の何段か前に、藁を差し入れて修復していく。

★前みの下部（腰みの）のみ傷んでいる時

下部の傷んでいるブロックだけ編みなおす。



■ 蓑製作

アラカワ ミツゾウ
荒川 美津三

神奈川県川崎市 在住

昭和4年、宮城県の農家に8人兄弟の五男として生まれる。幼少時より、祖父や親の作るワラ民具を見ながら育った。特に教わったこともなかったが、自然と作り方は身についていった。

上京してからは、子供の通う小学校で15年間、ワラ細工の縄ないや注連飾りを教えたり、地域の方々に指導したりしていた。2004年神奈川県川崎市立日本民家園 民具製作技術保存会「わら細工グループ」に入会してからは、本格的にワラ細工を再開する。

現在は、自宅に「アトリエ 3230(みつぞう)」を構え、ワラ細工を制作。数々の講師依頼だけではなく、自宅アトリエにはわらワラに携わる多方面の方々の来訪者が後をたたない。全国を見渡しても、ワラ細工の技術を伝承できる技術者は年々少なくなっているため、時間の許す限り自分の知っている作品を残し、後進の育成にも力を注ぎたいという思いで活動を続けている。

ミクリヤ マスミ
御厨 真澄

東京都小平市 在住

2010年 東京農工大学 科学博物館 友の会「わら工芸サークル」に入会

2012年 川崎市立日本民家園 民具製作技術保存会「わら細工グループ」に入会
荒川美津三氏に師事する

2015年 友の会「わら工芸サークル」のOB/OG会「ひこばえの会」に入会

2016年 「藁結」を結成し、藁の作品制作、研究、普及に努める

2019年 「『わらの文化』交流のつどい」(秋田県美郷町)ワークショップ講師
「ひこばえの会」がアジアデザイン文化学会の優秀組織賞受賞

アートフラワー、フラワーデザイン、工芸盆栽などを行う「真澄創作造花教室」主宰



9 あとがき

ムトウ タカノブ
加勢鳥保存会 武藤 隆信
(2016~2023年度 保存会代表 / 2024年度~ 副会長)

地区に伝わる加勢鳥行事を後世に引き継ぎ継承していくためには、人材の確保・育成はもとより実技の際に用いる衣服(蓑笠など)の確保・調達が必要であります。

このたび、荒川美津三先生をはじめ蓑製作の講師・スタッフのご指導により、「藁蓑作成の心」と「技術」を未熟ながらも学ぶことができました。私たちが使用する蓑の詳細を調べてくださり荒川先生と繋いでくださった宮崎清先生、修繕のことも念頭におき編み方や製作手法を開発・指導してくださった荒川先生と助手の御厨様、そして約5年間、粘り強く私たちを支え共に取り組んでくださったTAROスタッフ、いろんな方々のおかげでどうかここまでやってまいりました。本当にありがとうございました。

本プログラムを通して知り合った方々は、地域が違えども加勢鳥行事のことを真剣に考えてくださり、私たちはその思いを受けながら蓑製作に取り組んできました。それは、高齢化が進む本地区において多大なる励ましになったことも、ここに記しておきます。

今後は「蓑の作り方」をまとめた冊子や動画をもとに、藁蓑の製作技術を継承していきたいと思っています。



本冊子は、加勢鳥保存会のメンバーが荒川美津三さんと御厨真澄さんから藁蓑製作を習う際に使用した教則本を基に、写真や設計図、編み方、イラスト、アドバイス、動画などを加えて作成しました。各工程のQRコードを読み取ると指導動画を視聴できますので、荒川さんや御厨さんから直接指導いただくような臨場感も味わっていただければと思います。

「見島のカセドリ藁蓑製作技法の確保計画」の採択時が2020年度、コロナ禍でスタートした事業でした。対面での講習会を計画しながらも実施できず、荒川さんのご自宅と加勢鳥保存会の講習会場、TAROオフィスの3箇所をオンラインで繋ぎ、5~6時間ほど互いの手元をカメラで映しながら、技術継承を進めてきました。約2年半、その形で複数回開催し、2023年秋にやっと対面での講習会を開催することができました。荒川さんをご紹介いただいた藁文化の研究者である宮崎清先生にもお越しいたゞき、まずは互いの健康を讃えるとともに会えたことの喜びを嘯みしめました。そして、荒川さんと御厨さんに直接ご指導いただくと、数時間で保存会の皆様の製作技術があがっていく姿を見ながら、あらためて、人から人にしか伝承・継承できないものがあることを感じました。

見島のカセドリ行事「蓑の作り方」は、冊子だけでなくTAROウェブサイトでも公開しています。以前は地区および近隣地域で継承してきた蓑ですが製作者が不在となったため、本事業を通して、遠隔地である荒川さんの協力により佐賀県のカセドリ行事の蓑製作の技術継承を行いました。今後、高齢化などの理由により地区にて蓑製作の継承が途切れた際は、本冊子を参考にいただき、別の地域や芸能に関わる藁職人・研究者によって「見島のカセドリ行事」が助けられ、末長く伝承されていくことを願っています。

本冊子を作成するにあたり、デザイナーの皆様にもカセドリ行事の蓑製作の工程をともに追っていただき、幅広い世代にわかりやすく伝えるための手法を検討していただきました。最後になりましたが、厚く御礼申し上げます。

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス
リサーチャー
萩原麗子

発行：伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス
加勢鳥保存会

協力：荒川 美津三, 御厨 真澄, 宮崎 清, 荒川 陽子

映像協力：株式会社美雲

イラスト・編集：有限会社ウィット

■伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス
Traditional Arts Archive & Research Office (TARO)

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
京都芸術センター内

TEL.075-255-9600 FAX.075-255-9601

MAIL : taro@traditionalarts.net

URL : <http://www.traditional-arts.org>

2025年3月 発行
